

メルヴィル『白鯨』の「日本沿海の火山湾」について

蓮 井 敏

要 旨

Herman Melville の『白鯨』（1851）には、「日本沿海の火山湾 Volcano Bay on the Japanese coast」なる地名が登場する。この「火山湾」を「駿河湾」とする説³⁾もあるが確たる論拠はなく、いまだ定かとはいえない。

『白鯨』以前の 1796-97 年に日本近海を探索した Broughton⁵⁾ の海図と記述、また、1854 年に日米和親条約を結んだ Perry⁶⁾ の記述から、この 'Volcano Bay' が北海道南部の渡島半島から室蘭にかけてのいくつもの活火山に囲まれた「内浦湾」（もうひとつの呼び名「噴火湾」は、まさに「火山湾」）であることを示す。

キーワード：『白鯨』、火山湾、内浦湾、ブローントン、ペリー

1. Melville『白鯨』の「火山湾」—1851 年—

Melville の『白鯨』には、つぎのように「火山湾」が登場する：

So that though Moby-Dick had in a former year been seen, for example, on what is called the Seychelle ground in the Indian Ocean, or Volcano Bay on the Japanese coast; yet it did not follow, that were the Pequod to visit either of those spots at any subsequent corresponding season, she would infallibly encounter him there.

全集¹⁾ Ch. XLIV Char vol. 7 p. 249-250

「従って、モッビ・ディックが前の年たとえば印度洋のいわゆるセイチェルの餌場で、あるいは日本沿海の火山湾で見られたからといって、もしピークォド号が、次の同時節にそのいずれかの場所を訪れたとしても、必ずそこで遭遇するという事にはならない。」

『白鯨』²⁾ 44 章 海図（中）p. 27

以下『白鯨』本文の和訳は、阿部知二訳（岩波文庫版）を用いる。

『白鯨』全編をつうじて、「日本（Japan もしくは Japanese）」が十数ヶ所登場する。鯨の漁場、台風、鎖国などについての記述である。地名として Nippon（日本＝本州）、Matsmai（松前＝北海道）、Sikoke（四国）、'Volcano Bay'（火山湾）が見られる。この中で「火山湾」だけは、その場所を詳らかにしないまま現在に到っている。むしろ「火山湾」だけを Melville の文学的創作とするのはあたらない。

Harold Beaver は Penguin Books³⁾ の commentary において

'Volcano Bay on the Japanese coast': Possibly Suruga Bay, below Mount Fuji. 〈富士山の麓の

注記の肩ツキ数字³⁾等は、末尾の参考文献である。

駿河湾であろう)と、根拠を示さないままに注釈している。

これについて、坂下昇⁴⁾は、1840年代の対日認識を示すアメリカ側資料に、「火山湾」はもちろん、該当の駿河湾もないとした上で

「そこでさて、前出の「火山湾」が实在ならば、どこに該当するのだろうかというテーマは、(a)メルヴィルが、のちのペリのように相模湾まできていて、(b)ついでに、Fudsi Jammaを望見したんじゃないか、といった愉快的途方もない夢物語を生む。じじつ、イギリスの新鋭の学者、ハロルド・ビーヴァはこれが「駿河湾」だと断言している——不思議な話ながら、日本の学者からはコメントも異論も出されたのを聴いたことがない(九州南端にも、開聞岳のように、黒潮海流から望見されるクレーター湾があるのだが、これと『白鯨』を結ぶ線は存しない)。」

と続ける。よく知られた日本の火山、富士山の近くに湾を求めて駿河湾に短絡することは考えられないわけでない。開聞岳も海からは顕著な火山であってもクレーター湾を抱えているわけでない。いずれも、「火山湾」を裏づける根拠に乏しい。

2. Broughton 船長の「火山湾」命名—1796年—

しかし我々は、Melville『白鯨』刊行(1851)に先立つ1796年に、いくつもの火山に取り囲まれた湾に‘Volcano Bay’の名をつけたイギリス人船長がいたことに注目する。

18世紀末、大航海時代の終焉期に北太平洋の航路を探索する、フランス人 La Perouse, Jean François de Galaup de (1741-88) やイギリス人 Broughton, William Robert (1762-1821) らの日本近海の探検航海があった。La Perouse は 1787 年、対馬海峡、朝鮮半島東岸から北緯 52° まで遡上して、宗谷海峡をラベルーズ海峡と名づけるが、La Perouse も Broughton もサハリン(樺太)が、島なのか、シベリヤ本土と地続きかを定かにできなかった。後述の Broughton 海図は、ひとまず ‘Gulf of Tartary’ と記し、1809 年の間宮林蔵の海峡発見を待つことになる。

いっぽう 1796-97 年に日本の東岸から沿海州、南西諸島を探索した Broughton は、帰国後 1804 年にその報告集⁵⁾を刊行し、この中で ‘Volcano Bay’ 命名とその様子を描いている。(以下 Broughton⁵⁾ の和訳は筆者のもの)

(1) ‘Volcano Bay’ の命名と描写

Broughton⁵⁾ の 1796 年 9 月 30 日の記述(原著 p. 104)には：

The entrance into this extensive bay is formed by the land, making the harbour, which the natives call Endermo, and the south point of entrance, which they named Esarmi. They bear from each other N. 17°W. and S. 17°E. eleven leagues. There are no less than three volcanoes in the bay, which induced me to call it by that name. There are 50 fathoms of water in the centre, and the soundings gradually decrease on the approach to either shore: but the sketch to which I refer will best explain, though it has no pretensions to any great

accuracy.

「この広々とした湾への入口は、土語で Endermo (訳注. エンルム, 絵鞆→室蘭) という港を抱えた陸地と, Esarmi (訳注. 恵山) という南端の岬からなる。互いに北 17 度西, 南 17 度東に位置し, 距離は 11 リーグ (訳注. 約 53km) である。湾には何と 3 つもの火山があり, おのずからその湾をその名 (訳注. Volcano Bay (火山湾)) で呼ぶことにする。湾の中央で水深 50 尋 (訳注. 約 90m) あり, 測深は各々の岸に向かって徐々に減じる。すこぶる正確とは言わないが, 私の述べる描写でよく分かってもらえよう。」

During our stay, at the period of the equinoxes, we experienced generally very fine weather, with gentle land and sea winds from the N. W. and S. E., and no swell to prevent a ship riding in safety even in the bay; and the harbour of Endermo is perfectly sheltered from all bad weather.

I have seen few lands that bear a finer aspect than the northern side of Volcano Bay. It presents an agreeable diversity of rising grounds, and a most pleasing variety of deciduous trees shedding at this time their summer foliage.

「秋分の頃の停泊中, 概してすこぶる好天に恵まれ, 北西・南東からの穏やかな陸風と海風があり, 湾内ですら安全な停泊を妨げる大うねりもなかった。そして Endermo 港はあらゆる荒天から完全に守られる。

私は Volcano Bay (火山湾) の北側ほど見事な景観を有する陸地をほとんど見たことがない。立ち上がる陸地のすばらしい変化とこの季節に夏の群葉を落とす綿繡の落葉樹が見られる。」

Broughton のこの記述は 'Volcano Bay' の初出と考えられる。また, その名が, 富士山を湾奥に望むからでも, クレーター湾でもなく, その湾を活火山が 3 つも取り巻いていることによって名付けられた経緯に注意しておこう。

とはいえ, 'Volcano Bay' が世に知られ, 後述の Perry や Melville の関心と呼んだのは, Endermo 港を良港として紹介したこの Broughton⁵⁾ に由来するものと考えてよいであろう。

ちなみに, Broughton が訪れた室蘭市には, その乗船 Providence 号を顕彰する組織や研究^{10)~13)} がある。とくに文献¹⁰⁾ は Broughton⁵⁾ の抄訳と上記の La Perouse 資料を紹介している。文献¹²⁾ には Broughton⁵⁾ の一応の全訳が見られるが, 巻頭の実図などは省かれている。

(2) Broughton 海図と火山活動の考察

Broughton⁵⁾ の巻頭には, A 判全紙の海図 'A Chart of the N. E. Coast of Asia and Japanese Isles' が折り畳まれている。東日本の部分を [図 1] (ほぼ等寸) に示しておく。この海図は, 緯経度の柵目と天測による船の位置を 1 次と 2 次の航路を描き分け, 実測の海岸線は太線で描き, 他の資料から得られた既知? の海岸線は細線, 未知? のオホーツク沿岸などは空白に留めるなど, すこぶる実証的な表示方法をとっている。緯度はほぼ正確であるが, 経度については伊能忠敬図と同じように若干の誤差を伴う。また文献¹⁰⁾ が紹介する La Perouse 海図では, オ

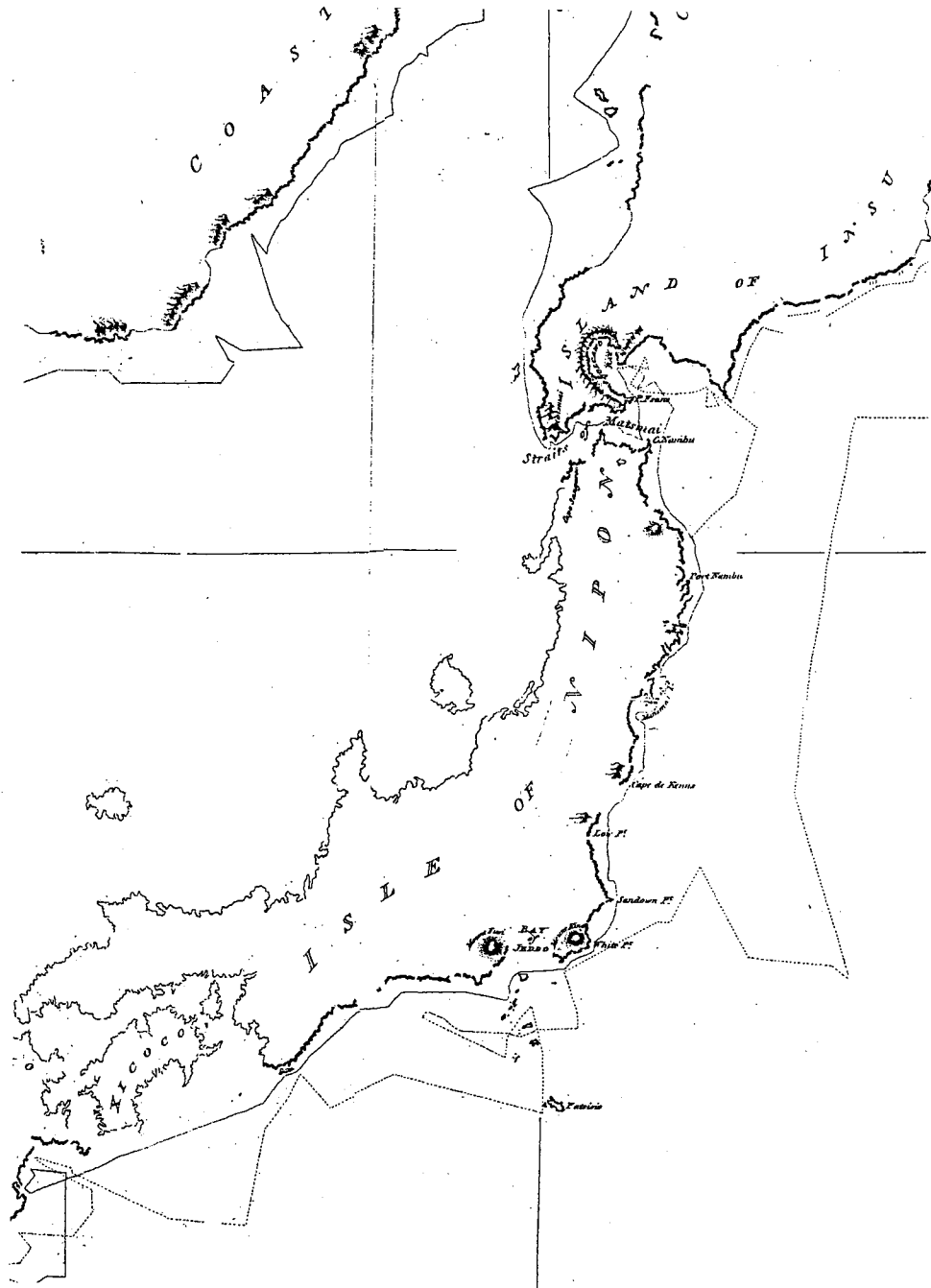


図 1. A Chart of N. E. Coast of Asia, and Japanese Isles. の東日本部分

ホーク沿岸を描き、逆に北海道の日本海側の海岸線が空白である。

この海図で、北海道・内浦湾の位置にははっきりと 'Volcano Bay' の文字を確認できる。([図2] 部分拡大図) また、この海図では Mount Fuji (富士山) が記され、Bay of Jeddo (江戸湾) が湾口に文字だけが示されるが、駿河湾は見出せない。また九州南部の海岸線はあいまいなままである。鎖国の当時、西日本の海岸線に接近して実測することは困難であったろう。現在、「内浦湾」あるいは「噴火湾」とよぶとき、室蘭・地球岬と渡島の駒ヶ岳山麓・砂崎を結ぶ線の北西側海域をいうが、Broughton の呼ぶ 'Volcano Bay' (火山湾) は渡島半島東端の恵山岬を結ぶやや広い海域である。

ところで、3つの火山を内浦湾周辺の18-19世紀の火山活動を理科年表⁹⁾の噴火記録に求めると、

- ②0 樽前山 1739, 1804-17, 1867, 1874,
- ②3 有珠山 1769, 1822, 1853.
- ②6 駒ヶ岳 1765, 1784, 1856, 1888.
- ②8 恵山 1846

であり、現在は平穏な駒ヶ岳、恵山も活動期であったことが分かる。活動期には噴火にとどまらず噴煙・噴気が長期にわたって観察される。したがって、Broughton の見た3つの火山は有珠山、駒ヶ岳、恵山の3山とするのが妥当であろう。湾の一部からは北東に樽前山が見られる

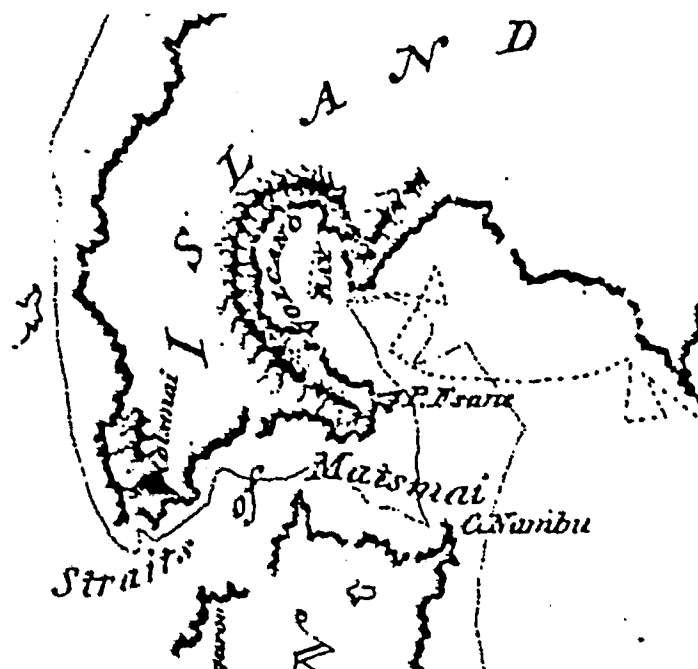


図2. 図1の北海道南西部の拡大図

から、この可能性がないわけではない。

3. アメリカでの「火山湾」と内浦湾への同定—1854年—

つぎの問題は、Melville が『白鯨』を執筆した 19 世紀前半のアメリカで、Broughton の名づけた 'Volcano Bay' が知られていたか、である。

『白鯨』刊行(1851)直後の 1853-54 年に日本を訪れた Perry, Matthew Calbraith (1794-1858) は、日米和親条約の締結後に下田・函館両港を踏査し、函館では 1 隻を火山湾に赴かせている。その『日本遠征記』⁶⁾には、'Volcano Bay' も Broughton の名も、Endermo 港も読みとれる。(以下の『日本遠征記』の和訳は、土屋喬雄・玉城肇 訳(岩波文庫)による。ただし、漢数字は算用漢字に改めた。)

「その翌日サザムプトン號は提督の命を受けて、函館より約 70 哩、蝦夷の東南端に當るエンデルモ港(室蘭港?) Endermo harbor の在る火山灣 Volcano Bay を探險するために派遣された。……同船は函館を出発した日の午後 5 時には火山灣の南岬沖合に到着した。…」

(1854 年 5 月 20 日)

「天測儀觀測を行ひつゝ北緯 42 度 17 分の地點に至って、東進中の同船は或る灣入部に達した。それが火山灣の入口と思はれた。……北東に當つては噴出中の火山が 2 つあって濃い煙を濛々と吹き出してゐた。その煙は微風になびいて黒く尾を引き、附近の山嶺の銀のやうに輝く雪の上に不斷の影を去来せしめてゐた。

そこに葬られてゐるブラウトン船長の一部下の名をとってオレーソン Olason と呼ばれてゐる一小島を通過してサザムプトン號はエンデルモ水道に向ひ、夕方になって陸地附近に錨を下ろした。…」

(1854 年 5 月 27 日)

「…エンデルモ港訪問中は別段とり立てて云ふほどのことは何もなかったけれども、たゞ或る夜の事他の一火山が爆發して、活動中の火山が同時に 3 つ艦上から見えるやうになった。眞夜中に或る山頂から突如炎々たる大火焰が噴出し、海陸を包んでゐた暗黒の夜を一瞬にして眞晝のごとく明るくし、その光景は一大壯觀であつた。他の兩火山はただ煙を吐いてゐるに過ぎないのに、新火山は火焰を噴出し續けてゐた。

サザムプトン号の指揮官ボイル大尉は出帆に先立ってエンデルモ港口に在るオレーソン島を訪れ、ブラウトン船長が残して行つた一水兵の墓を發見した。……」

以上 『日本遠征記』⁶⁾ (4) p. 148-151

実際、Broughton⁵⁾ の上記「Volcano Bay 命名」の 1796 年 9 月 30 日の条の冒頭には

The morning Hans Oldson, seaman, died. He was a Dane by birth ; and his death unhappily occasioned by a tree falling upon him. After lingering in torments for some days, a mortification took place; and we had the misfortune of losing a very willing and well-

behaved man. He was buried in the small island, to which, in consequence of event, I gave his name.

「朝、水兵ハンス・オールソン死亡。生まれはデンマーク人。その死は、1本の木が彼の上に倒れた不慮の事故による。数日痛みが継続した後、壊疽が起こった。そして、不幸にも我々は、何ごとも厭わず粗野でないひとりの男を失うに到った。彼は小島に埋葬され、このことに因んで、その島に彼の名をつけた。」

とあって符合する。ただ、水兵の名 Oldson が、Perry⁶⁾ では Olason となっている。室蘭湾口の小島 (Oldson 島) は「大黒島」と呼ばれ、絵鞆岬から指呼のうちにあり、現在、島にはその記念墓碑が建てられている。Broughton⁵⁾ p. 96 折込には、Endermo 港の測深図 Plan of Endermo Harbor in the Island of Matsmay [図3] が挿入され、ここにも 'Volcano Bay' の文字が見られる。現在、製鉄所や港湾施設のために海岸線が前進しているが、埋め立て前の自然地形を正確に写すこの図の小島には「Oldson」島の文字はなく、上記の本文にのみ紹介されている。ここでも、Perry 艦隊の Southampton 号指揮官には、Broughton⁵⁾ 本文の内容が既知であったことが示唆されている。

なお『日本遠征記』の「北東の噴出中の2火山」は、北の有珠山、東の樽前山と解すべきであり、Southampton 号の火山湾 滞在中に爆発した火山は、前述の噴火記録からも、渡島・駒ヶ岳とするのが至当であろう。

また、鯨・捕鯨史の観点から考察すると、19世紀前半は南太平洋捕鯨漁場が限界に達し、北

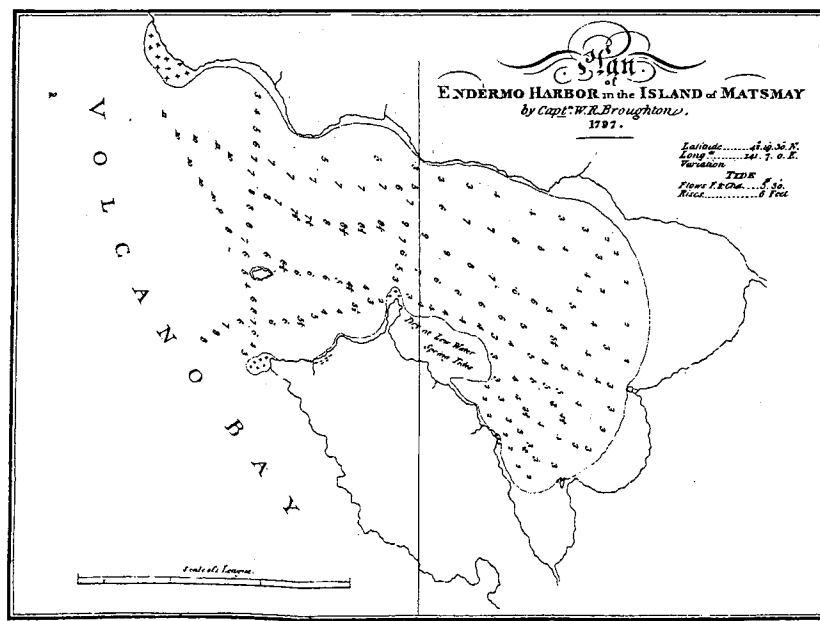


図3. Plan of Endermo Harbor in the Island of Matsmay

太平洋に漁場を拡大した時代である。1818年に日本漁場が知られるとともに、欧米の遠洋捕鯨船が北太平洋に最後の漁場を求め、鎖国中の日本との接触が起こり、Perryの開国要求にもつながるのである。これらに詳しい森田勝昭⁸⁾は、石田数好による日本近海の鯨の回遊路を示しているが、千島列島に北上する回遊路は種によって明らかに内浦湾に短い枝線を描いている。(現在も内浦湾の湾口部にはイルカが生息し、ときに鯨も見られ、室蘭・絵鞆からはイルカ・鯨ウォッチングの船が出ている。)これに対して、小笠原諸島から北上した回遊路は三陸沖と熊野灘の2方向に分かれて駿河湾に直進することはない。これまた「Volcano Bay = 駿河湾」説を否定するものである。

こうして、Broughtonが命名した‘Volcano Bay’が1850年代のアメリカに知られていたことが分かり、Melvilleの‘Volcano Bay on the Japanese coast’も、駿河湾でなく、北道南部の内浦湾(またの名、噴火湾)と考えるべきである。

4. Broughton 海図と Melville

Melvilleが、実際にBroughtonの本ないし海図を見たことを確認できれば申し分ない。Melvilleの場合、その蔵書と読書記録は比較的良好に調べられており、“Melville’s Reading”⁷⁾には567冊の蔵書と借用本が挙げられている。しかし残念ながら、この中にBroughtonの名も書名も発見することはできない。Melvilleの文学的、精神的な背景を与えるものであるが、ここには鯨や海事関係の書はほとんど見られない。

Melvilleの年譜から、1839年の貿易船での5ヶ月の平水夫生活、とくにLiverpool滞在、1841～44年の捕鯨船での生活とその後の南太平洋放浪、あるいは1849～50年のイギリス、大陸諸都市訪問などの期間に、イギリスあるいは船上で、Broughtonの海図や本に触れている可能性は考えられる。

ちなみに、『白鯨』の中に、つぎの1節がある。

And so Starbuck found Ahab with a general chart of the oriental archipelagoes spread before him; and another separate one representing the long eastern coasts of the Japanese islands — Nippon, Matsmai, and Sikoke.

…全集¹⁾ Ch. CIX Ahab and Starbuck in the cabin vol. 8 p. 249-250

「…エイハブは、彼の前に、東洋諸群島の一般海図と、もう一枚は、日本群島の長い東海岸 — ニフオン、マツマイ、シコケをしめす分図とをひろげていた。」

『白鯨』²⁾ 109章 船長室におけるエイハブとスターバック(下) p. 121)とある。この「分図」は、残念ながらBroughton海図そのものではない。Broughton海図ではNipponは‘NIPON’とあり、北海道はMatsmaiではなく‘INSU’(蝦夷)をあて、四国Sikokeは‘XICOCO’と表示されているからである。地名標記はPerryにおいてもかならずしも一致しな

い。Broughton も、図 1 では Island of Insu と松前を蝦夷（北海道）の一カ所と捉えるいっぽうで、図 3 では Island of Matsmay と表している。Melville や Perry は、松前＝北海道、かつ松前の中に松前の町との認識といえる。

また、Perry⁶⁾ には、つぎの記述がある。

「...その日の午後、10 呎乃至 20 呎海面上に突出してゐる三つの危険な岩群を間近に通過した。これ等の岩は、海圖の上で、ブロートン岩群 Broughton Rocks と云はれてゐるものと想はれた。そして、もしさうならば、その位置は明らかに甚だ誤って記載されてゐるし、もうさうでなかったならば、それは今まで歐米の先輩航海家達の観察から漏れてゐた岩群である。これ等の岩群が今日まで注意をされなかったらしいと云ふことは、少しも珍しいことではないと思はれる。何故ならば、今までに日本の南部及び東部沿岸を訪問した船は殆どないからである。且ブロートン Broughton, ゴール Gore, キング King, クルーゼンシュテルンが提供し、又過ぐる 2 年中に同海岸を訪れた三四艘のアメリカ船イギリス船が提供した乏しい報告を材料として編纂した甚だ不完全な海圖が、少しでも正確であらうと期待するのは理由のないことである」 (1854 年 2 月 11 日)『日本遠征記』⁶⁾ (3) p. 135-136)

これは、当時、日本近海の正確なデータが乏しかったこと、その中で Broughton 海図がひとつの基本資料であったこと、Broughton 海図などを踏まえた改訂海図の存在を示唆しており、Perry のみならず Melville も目にしていたことが考えられる。

5. ま と め

Melville『白鯨』の刊行（1851 年）に先立つ 1796 年に、イギリス探検船が北海道南部の「内浦湾」（あるいは「噴火湾」）を訪れた船長 Broughton は、この湾を 'Volcano Bay' と名づけ、報告書⁵⁾ およびその海図に記している。『白鯨』刊行の直後（1854 年）に日本開国を求めた Perry 提督もこの 'Volcano Bay' に探検船を派遣し、『日本遠征記』⁶⁾ に Broughton の名を読みとれる。19 世紀前半のアメリカで「内浦湾＝Volcano Bay」が知られていたことから、『白鯨』の「火山湾」もまた、「内浦湾」でなければならないと考察できる。

参考文献

- 1) "The Works of Herman Melville" (メルヴィル全集)
Standard Edition vol. 7, 8 Russell & Russell (1963)
* Melville, Herman: "Moby-Dick or the Whale" (1851) London, New York
- 2) メルヴィル：『白鯨』（上中下）（阿部知二 訳）岩波文庫（1956-57）
- 3) Melville, Herman: "Moby-Dick; or the Whale" Penguin Books (1972)
- 4) 坂下 昇：メルヴィルと幕末日本——「ハナウマ」考—— 図書（岩波）1986. 8 p. 2-7
- 5) Broughton, William Robert: "A Voyage of Discovery to the North Pacific Ocean" (1804) London

- 6) ベルリ提督：『日本遠征記』（3）（4）（土屋喬雄・玉城肇 訳）岩波文庫（1953-55）
- 7) Sealts, Merton M. Jr: “Melville’s Reading” The University of Wisconsin Press（1966）
- 8) 森田勝昭：『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会（1994）
- 9) 理科年表 2001 年版 丸善（2001）
- 10) 改訂・プロビデンス号来航と室蘭 室蘭港湾資料第 5 集（1969）市立室蘭図書館
- 11) 『新室蘭市史』第 1 巻 室蘭市市史編纂委員会（1981）
- 12) 久末進一 訳・編著：プロビデンス号北太平洋探検航海記
室蘭市役所企画財政部開発課 プロビデンス号建造検討委員会（1992）
- 13) 久末進一・柏木直：蝦夷・千島・樺太の探検航海—プロビデンス号研究ノート
室蘭市民俗資料館研究紀要 第 1 号（1994）

On ‘Volcano Bay on the Japanese coast’ in Melville’s “Moby-Dick”

Satoshi HASUI

Abstract

In Melville’s “Moby-Dick” (1851), we are able to meet ‘Volcano Bay on the Japanese coast’. Where is that bay? Some one comments ‘possibly Suruga Bay, below Mount Fuji’.³⁾

We show, however, that ‘Volcano Bay’ should be the bay surrounded by three volcanoes, located in southern part of Hokkaido in Japan. This bay is ‘Uchiura-wan’ bay, another name ‘Funka-wan’ meaning just ‘Volcano Bay’.

This bay was visited in 1796 by an english captain W.R. Broughton⁵⁾ and primarily named ‘Volcano Bay’. Moreover, in 1854, the Admiral M.C. Perry⁶⁾ visited in Japan, and dispatched one of his warships to this Volcano Bay.

Keywords: “Moby-Dick”, Volcano Bay, Uchiura-wan bay, W.R. Broughton, M.C. Perry.